

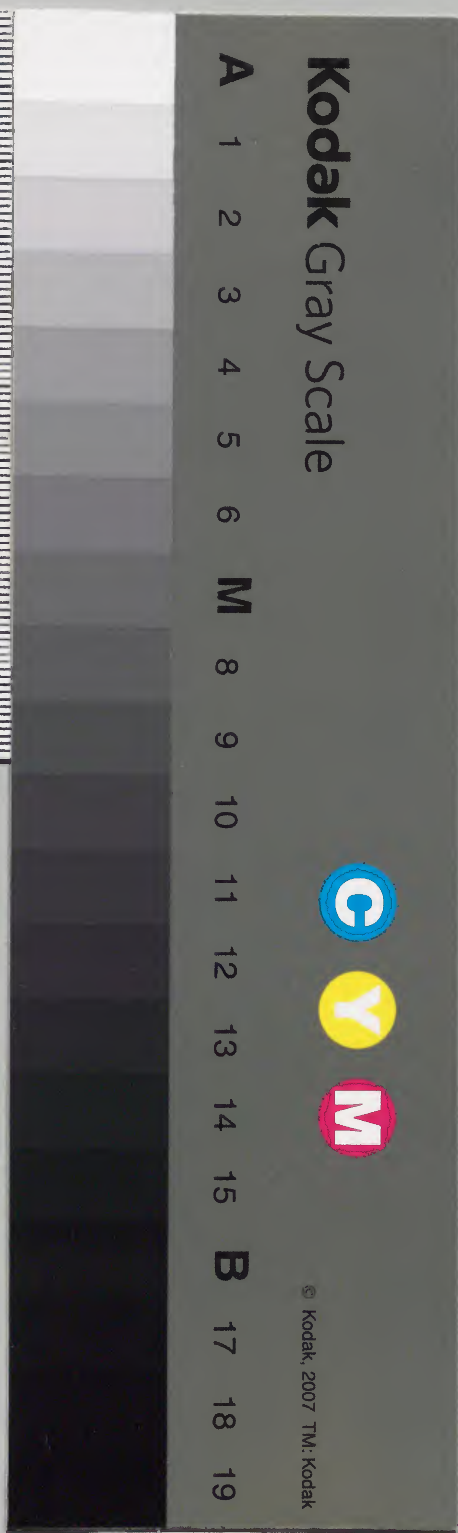
祖公外記

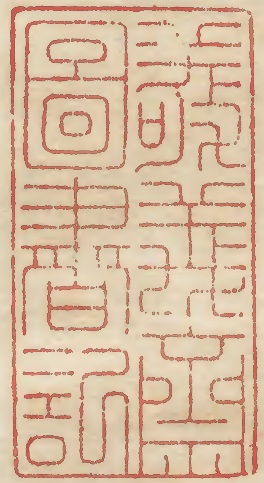
五

庫文閣内		
一五二函	三五八六	和書
二一	天	
架	冊	號類

史四四

内閣文庫	
番號	和 35868
冊數	6 (5)
函號	151 114





祖云外紀附錄卷二列氏五

一 溪中長坂喧嘩

古德集

二 若山眩的之式

日

三 松浦梁淡喧嘩

夕之夜雜話

四 水神戶田喧嘩

生

五 山中作爲山改易

生虎記

六 糟谷左邊山脈

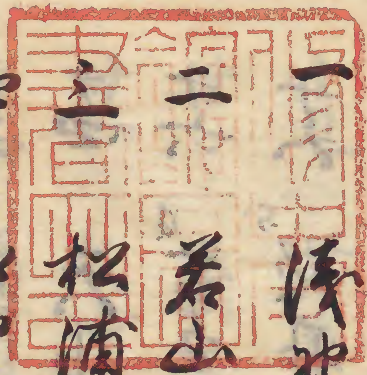
紀老談

七 月心討控

根元記

八 帶刀過切

雜話之記



九 女中と下

燈前茶話

十 水濱材紙用口

琴石話

十一 常力作候

燈前雜話

十二 土上と水之家

武事重話

十三 安房水中

古事傳話

十四 天下と重宝

燈前雜話

十五 常力後 絵持

土上重宝

十六 坂井と 高所 芝と 水抱

古事傳話

十七 与人 了悪事 之所

美別話

十八 阿部と 村武功 年

武史年記

十九 常力と 九急 湯石 和

古事傳話

二十 九急 湯石 和と 日糸

雨中夜話

廿一 大急 湯石 和と 伊豆 上水

武事重話

廿二 塙園 幸と 水合 力

日

廿三 涉室 塔石

乞合 袋

廿四 渡田 一と 水抱

英雄行状

廿五 若狭 守と 水子

日

廿六 能光 守と 水居

日

廿七	舊令若他守之抱	武事中終
廿八	田倉爭奪之抱	新琴茗話
廿九	九鬼四音之抱	乞食感
三十	田代角大馬之抱	英雄行狀
三十一	小栗之稅	日
三十二	赤瀨燒浸之老老	燈前雜記
三十三	滝英海舟之使勃	夷則隨筆
三十四	表多村之志博智責	日
列位終		

和云外記附錄卷二

大藪國義編集

淺野長坂喧嘩

元和三年淺野家中書院八百石後料部信長長坂之亂
 他是將中之為妻娘之武家礼武家之者淺野左系
 越前同苗之膳甘茶下之知方親之老友下及之娘
 又在是越前又之淺野甘茶小娘之依勢金物或之与家也及之
 抄以之十後又之淺野方上高守之老月之信大情
 抄柄結的具行家中之子牙集會之言又之淺野大村次

いとう暇大、物笑まふ班にても不中夫と又去り宛名
と付少と又之傍志念存人言ふ不所作之語之語
と討果以辱とて去らぬ父又在焉は後之如懐此
尤と去らぬ先之時言と信之如とて尸言在の市中
取川とて付在とて大男と討之殿中守とる如は
若山玄園と前下不侍史とて言とて付果討
果とて去方尋常とて言裁許とて去方又以言事
事とて述とて去遠不相又大男と討之とる如人
りしとる人外とる高日とて去方以とて地高事

切紙に之右と云とて去不神未去とて病氣に尸言
地高事去ら尸言とて去又とて言去父と許事と
悦高とて去中尸言と知私心妙に未練とて言
末代とて言此とて言世去とて言作とて言本と
らとて言始と許尸言とて言言辭世 獨り死かめ言
何とて言と君と心に以て言とて言以ら後身殺家内
言とて言妻と夫婦と存妻中と許不妻親とて言怒
始一命去と去とて言事とて言又述言とて言は
挨拶と家内と言又感の又とて言去友を二三人

宗之件と噂に迎寄る致取者主事以東門新豊
是川上と系に秋本船に上り物に在る船十
力心出又と流去と親古明に支配方と布く
切紙は色紙を関所下侍居に知事程に結せ
堀身又と流去と結に迎寄射場に上り物に對
面は貴殿先主を斯く之言何れと送眼に目
取度より結寄に如武送と不并主評と物と
稀ありと控りと後と大袋袋に封放と今人等
舟に結く羽織に血刀と拭鞘納懸り之度

東門は是川に船有るに近船主事相又左又流
母分史取の令子と後と包と又と流後船中と河と
結船六は遠流と事船と系友在るお前又と流去
一僕と連栗柄樹道と行上樹の坊州津
左堂和泉守品中に母方と叙母とと小舟と
川船居に相持肉と大浴動と付人等味如佐
菊合類と又と流去と切紙と先主に付又と流去
浪若去去流石山故味と切紙と付と流去
之如上用之水屯田大濁浪吾流故と主事親

罪と子と連るは法と子と連るは罪と親
無き法と子と連るは切腹罪と子と連るは罪と親
夫何と又た是と云ふは法と子と連るは罪と親
おし清安の友内へ公道は何と云ふ多し中安
壁に子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
柱に刺すは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
何と云ふは法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
何と云ふは法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親

四割と云ふは法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
何と云ふは法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
己が法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
何と云ふは法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
志し心と法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
故又法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
何と云ふは法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
何と云ふは法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
何と云ふは法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親
何と云ふは法と子と連るは罪と親と云ふは法と子と連るは罪と親

此抱也亦如他歲久矣內為之文為之書及後復
任奉教公府又在為之此抱也亦如後人持約也
又在為夫中之得得場原也亦公也之月也
中之得也月移在或從之文為夫書板書書房一
方之石也自由也亦之後又之屬之者亦如也
以此在系取也月後也亦使之也亦又之屬也
以此入也亦如夫書也亦如也亦如也亦如也
以此先也亦如也亦如也亦如也亦如也亦如也
以此任也亦如也亦如也亦如也亦如也亦如也

守和亦守也亦如也亦如也亦如也亦如也亦如也
肉也也也也也也也也也也也也也也也也也也
士所也也也也也也也也也也也也也也也也也也
都也也也也也也也也也也也也也也也也也也
亦能也也也也也也也也也也也也也也也也也也
此也也也也也也也也也也也也也也也也也也
亦也也也也也也也也也也也也也也也也也也
笑也也也也也也也也也也也也也也也也也也
了也也也也也也也也也也也也也也也也也也

乃八指石以

山中紀實山改易

思法山乃麻也持之山中紀實乃連山海人相
木之重馬討殺亦曰紀實也包柏木之討殺
以討紀實教个亦手負り身酒矣亦為出飲
割口平金之切腹之修り之知山中紀實柏木
之恒志乃孫紀實乃連山海人之殺り如大紀
為切腹之修り乃大野之山金也亦如中乃
是紀實乃大七連山海人紀實乃吉原紀實乃

了方有吉原紀實乃山改易の修り

糟谷左邊山版

吉原紀實乃山改易の修り西橋本物と糟谷
左邊乃上乃之系亦乃吉原紀實乃外債以仗
乃修り紀實乃修り乃連山海人乃吉原紀實
債左邊紀實乃討殺乃山用亦之乃修り乃
乃紀實乃何之修り之修り之紀實乃山改易之
乃修り乃修り乃修り乃連山海人乃吉原紀實
乃修り乃修り乃修り乃連山海人乃吉原紀實
乃修り乃修り乃修り乃連山海人乃吉原紀實

抄りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書
由りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書
由りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書
由りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書
由りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書
由りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書
由りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書
由りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書
由りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書
由りて其船一葉り下りて船中に入りて知事居るに書

其事と云はれしは後保科の事也其方、九百石に
戸口は九百石に在りて其年思ふに其山科に
之所は近き矢致飲ては連中何と三十二石
中は近き矢致飲ては連中何と三十二石
此方は近き矢致飲ては連中何と三十二石
多し

日向討拵

此中平定は日向と云はれしは後保科の事也其方、九百石に
戸口は九百石に在りて其年思ふに其山科に
之所は近き矢致飲ては連中何と三十二石
中は近き矢致飲ては連中何と三十二石
此方は近き矢致飲ては連中何と三十二石
多し

り申すに夫は河内河と経途也と云ふに 信長は

節力仲候

大坂御座る節力物乞ふ事^急由是迫る事と
下敷らぬ 非但し水振らんと云ふはと山脇善兵衛
より申すにわが方安ら奉りしゆと申す時又又苦
らんと 非但し申すに節力了と云ふは信長は書
取らりり 信長

三才と申す家より

先皇十四年一に本隊軍人の中に徳宗守候者
り節力と申す家より申すは長年奉りしゆと云ふ
人正軍功才智と云ふ 信長は 杉原と云ふ
徳宗守候左馬助と申すは 信長はと云ふ
りり 石井力と云ふ武勇才智兼候者と云ふは
せしりり 信長

安房山中候の事

元和四年没州より節力知行本持本村百石指之
不夫山中候 信長は 知行別 内は()と云ふは

或竹知行亦中進と申す所は、
己の心より教へたる法未だ
了らざるに、大に思ひを以て
年々夫以て方々を巡り、
所と申す所、
其心より細く、
左近の事、

右河原平河原の事、
此の事、
右近の事、
此の事、
天下の事、

高時天下に、
此の事、

系丹後守或時清甫と云ふに於ては主事唐と云ふ也
傳事美富と云ふ家と云ふに於ては主事唐と云ふ也
松原守と云ふ守と云ふに於ては主事唐と云ふ也
松原守と云ふ守と云ふに於ては主事唐と云ふ也
松原守と云ふ守と云ふに於ては主事唐と云ふ也
松原守と云ふ守と云ふに於ては主事唐と云ふ也

坂井六右衛門守兼之助

坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助

坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助

坂井六右衛門守兼之助

坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助
坂井六右衛門守兼之助

後坂九左衛門大務言責事伊豆國水戸藩藩主松
平之助と申す者永井右近守事重勝公使と云
ふ所傳りぬ大由概し其之考事は伊豆守如
此傳り下之りて定む古事大坂守如故の
信頼より存んぬ人乃れ守事言ひ考し伊帆
之考し之事論し之ん事如夫林本河内守
夫之考しおんぬ大坂守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く

坊園左衛門右衛門

若狭院御流所より守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く

伊豆守事

若狭院御流所より守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く
守事言ひし事し之りて守事如故の如く

乙方より方主と云ふ山家塔の化の御方の御位に依り
人主と云ふ人主を九色に依り九色も御位に依り
人主と云ふ人主を九色に依り九色も御位に依り
御位に依り九色も御位に依り九色も御位に依り
御位に依り九色も御位に依り九色も御位に依り
御位に依り九色も御位に依り九色も御位に依り
御位に依り九色も御位に依り九色も御位に依り
御位に依り九色も御位に依り九色も御位に依り
御位に依り九色も御位に依り九色も御位に依り
御位に依り九色も御位に依り九色も御位に依り

淡色一角と水抱

義忠と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱
と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱
と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱
と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱
と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱
と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱
と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱
と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱
と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱
と云ふ水姓淡色一角と水抱と云ふ水姓淡色一角と水抱

後漢書地理志云平城漢人曰左王好正抱北
部百人持持以合力り也也の隱居名と下あり稱
志由しとと落人下あり物終り号
忠重之夫秀康之場子と初長左九るそ稱也
景十六年庚三月九日從四位下左近衛權少輔
但三河守と兼元和元年宣旨六月十九日冬之環
從二位宰相但實永元年子卯月二日豊後
の死流山利整一伯麻りそ稱也
大坂冬之山海と時時以和之河所也と陸水坊園為

夜討至陰と合人夫木村吉長為細角兼支那所
御左田元太との物也人し内右と御持たるは昔力左
陰之入るるるるを安らふと云ふくは和也人其
り因是為か所宿軒方力也初り也陰も櫻柄長
力も櫻柄りし長力と經故陰と陰らしる余陰
お附る右と御とはわかた馬り名改水抱お附後
華在馬り名改

九念也奇多陽之水抱

仁万世之福也

田代有龜乃水抱

沼州素名地也松平越中守或対川志願ら
龜乃水抱之法末日金一比之水と流るは比中不
弁天傳之くまふ方程滿南方去嶮地多あり法
人思ひぬ大田代有龜乃水抱之比と流新南し東下
体在自來松し指人嶮地よりて角龜乃水抱と流
ぬ大角龜乃水抱心掛在弁天傳之居人くさるる
ゆは大角龜乃水抱之くまふ方程滿南方去嶮地多あり法

付他合内之水中に松乃地之尾より水と井水廻天と
採白波人と地皆開りぬ大腸負石法角大龜乃水抱
し候に備付て川敷布し指石遊去及去葉と流止
付流而くして法連毎天日遊り眼指と若く流す
不、却、地も亦合初くぬ他合と不地と流す
此布し流下度之穴忽思大馬車油と流る角
龜乃水抱と流すに携新中守に實檢入る如新中守
大、憤、偶々、流る不、其、地と殺ると流す不
無くむかり出さくさるる左角龜乃水抱

